

思惟空間



考えをめぐらし、物思いにふける時間

日文



1

特別な経験への旅



思惟空間

考えをめぐらし、物思いにふける時間

思惟空間には、韓国の国宝に指定された半跏思惟像2体が並んで展示されています。

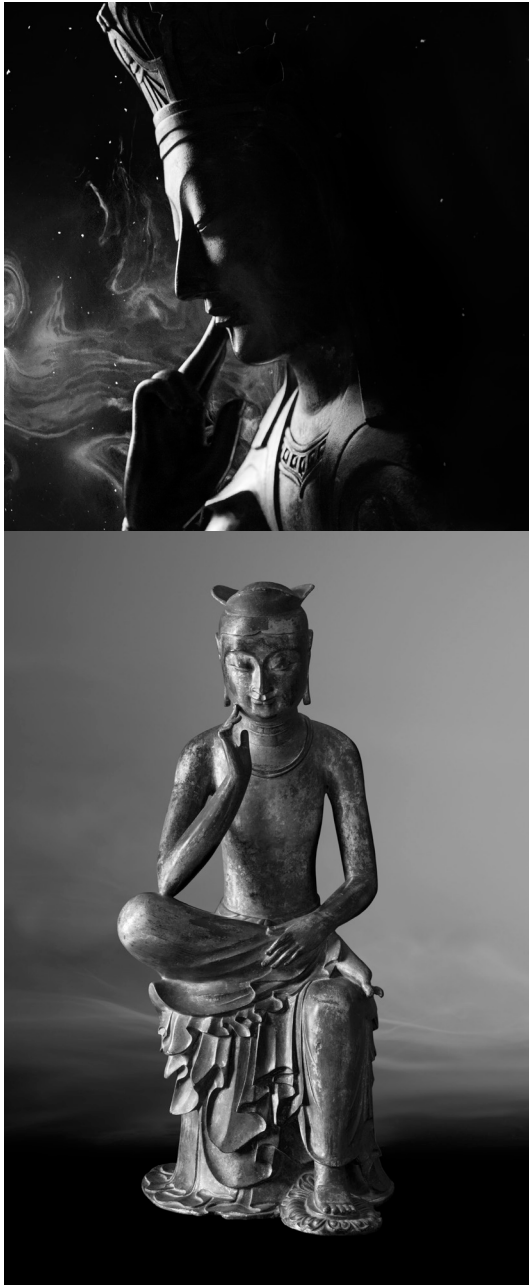
暗く静かな思惟空間に入りますと、果てしない水の循環と宇宙の膨張が広がります。時空を超えた超現実的な感覚が呼び覚まされ、きらめきに沿ってゆっくりと歩んで近づきますと、約1400年の時と宗教と理念を超え、物思いにふける2体の半跏思惟像に出会います。

それぞれの半跏思惟像は、この世の先を眺め、苦悩するがごとく、宇宙の理を悟ったように神秘的な微笑みを浮かべています。こちらの思惟像を眺めているうち、心に小さな波紋ができ、癒やしと安らぎをもらたすことでしょう。

物思いにふける時間—「思惟空間」での静かな経験は、今の時代を生きる私たちに与えられた特権です。2体の半跏思惟像とともに思惟する旅を自分の物語にしてみたいはいかがでしょうか。

2

2体の半跏思惟像



金銅半跏思惟像
三国時代 6世紀後半、高さ 81.5cm、重さ 37.6kg、国宝、国立中央博物館蔵
bon 2789

金銅半跏思惟像
三国時代 7世紀前半、高さ 90.8cm、重さ 112.2kg、国宝、国立中央博物館蔵
duk 3312

思惟の存在、半跏思惟像の意味

右足を左膝にのせ、右手の指を軽く頬にあてて

下を向き目を細め、神秘的な微笑みを浮かべつつ物思いに
ふける半跏思惟像。

「半跏思惟像」とは、その姿勢に由来する名称です。「半跏」は、片脚を垂下し、もう一方の脚を垂下脚の上のにのせた結跏趺坐という座り方を示します。「思惟」とは、人間の生老病死を悩み深く考える姿勢を表します。つまり「半跏」の姿勢で片手を頬に当て物思いにふける仏像を半跏思惟像と言います。釈迦牟尼は太子の頃から人間の生老病死について思索を深め、出家を決心する人生の岐路でも苦悩を重ねてきました。半跏思惟像は、このように物思いにふける釈迦牟尼の姿でありながら、悟りを求める修行者と菩薩の姿でもあります。半跏の姿勢は、止まることと進むことを繰り返しながら悟りに至る動きの中にあります。片脚を垂下し座禅を組んだ脚を解こうとしているのか、あるいは瞑想するために座禅しようとしているのか、修行と煩悶が交差する瞬間です。そっと閉じた口元に浮かぶ穏やかな微笑みは、深い思索の末にたどり着く悟りの刹那を表しています。この刹那の微笑みに、多くの煩悶や考えが溶け込んでいるのです。



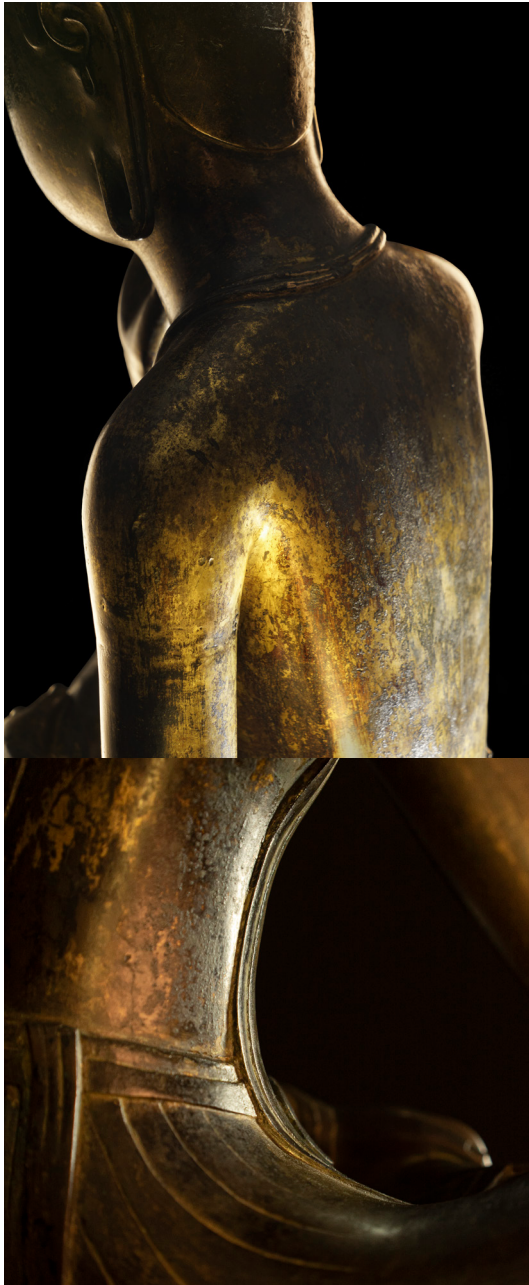
金銅半跏思惟像
三国時代 6世紀後半、高さ 81.5cm、重さ 37.6kg、国宝、国立中央博物館蔵

金銅半跏思惟像
三国時代 7世紀前半、高さ 90.8cm、重さ 112.2kg、国宝、国立中央博物館蔵

半跏思惟像の美学：調和とバランス

半跏思惟像は、単独の礼拝像として多く作られました。2体の半跏思惟像の美しさは世俗の感覚を超え、信仰の境地を最高の芸術として表現しています。この2体は一見似ているように見えますが、表情や服装、大きさと重さ、制作時期などのすべてが異なっています。展示室で左側の半跏思惟像は、6世紀後半に制作されました。まっすぐ通った鼻筋やはっきりした目つき、華やかな装身具、整った衣文が特徴です。両肩の上で羽のようになびく衣が躍動感を与え、布の間から見える首飾りや腕輪が華やかさを添えています。

一方、7世紀前半に制作された右側の半跏思惟像は、簡素で控えめな様式が見られています。特に、3つの半円からなる宝冠と、2つの円形の首飾りは、何も着ていない上半身のシンプルさを際立たせます。それに対し、膝の下の方の衣文はリズムミカルに波打っていて、立体的に流れ落ち躍動感を感じさせます。繊細な両手の指と、力を入れて曲げたような足の指には緊張感があふれています。

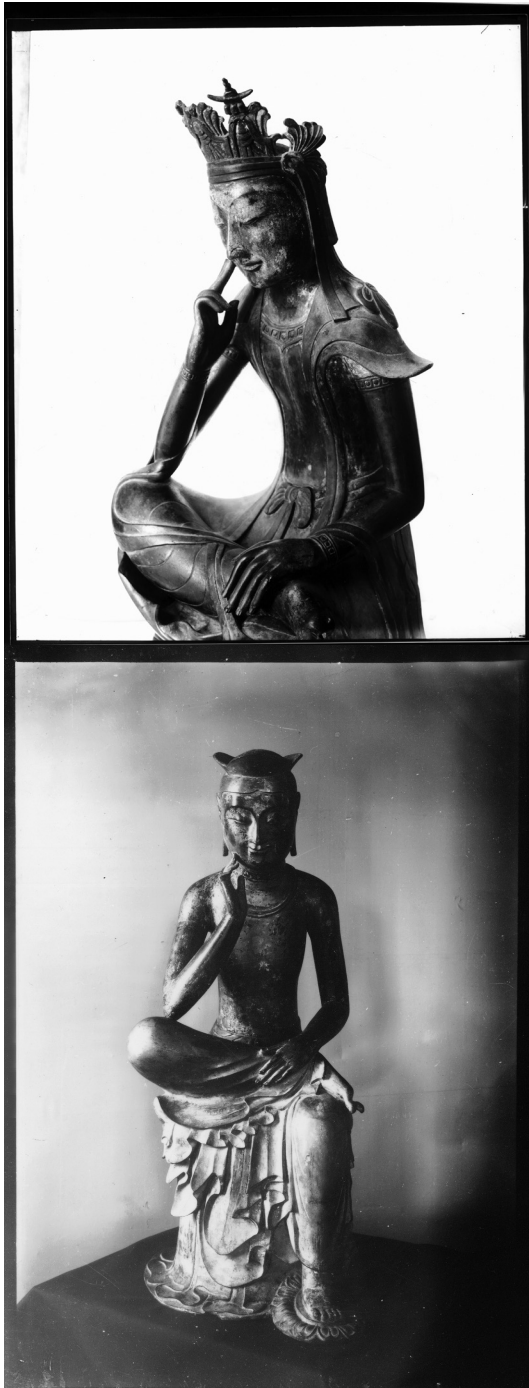


半跏思惟像の制作技術

2体の半跏思惟像からは三国時代の最先端の鑄造技術が見て取れます。青銅の仏像を作るには、まず頭部から台座まで鉄心で骨組みを作り、粘土で覆って内型を作ります。その上に蜜蝋を塗って仏像の形に彫刻した後、土で覆って鑄型(外型)を作ります。そして、鑄型に熱を加えて中身の蜜蝋を溶かすと仏像の形の隙間ができるので、ここに溶かした青銅を流し込んで固めます。青銅が固まる過程で鑄型が割れることがあります。こちらの2体の半跏思惟像はそういった失敗がなかったようで、0.2～1.0cm前後のほぼ一定の厚さで1m近い高さの像ができあがっています。また、鑄造後に鑄型を固定した装置や釘を取り除いた跡が肉眼では見えなほど小さく、金属加工技術も非常に優れていたことがわかります。どちらの半跏思惟像も修理の跡が残っていますが、肉眼での確認は難しいです。

金銅半跏思惟像
三国時代 7世紀前半、高さ 90.8cm、重さ 112.2kg、国宝、国立中央博物館蔵

金銅半跏思惟像
三国時代 6世紀後半、高さ 81.5cm、重さ 37.6kg、国宝、国立中央博物館蔵



金銅半跏思惟像
韓国日帝強占期(1927年)撮影、25.2×30.3cm、ガラス乾版
国立中央博物館蔵

金銅半跏思惟像
韓国日帝強占期撮影、11.9×16.4cm、ガラス乾版
国立中央博物館蔵

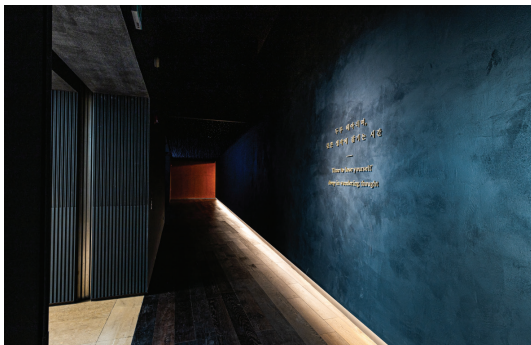
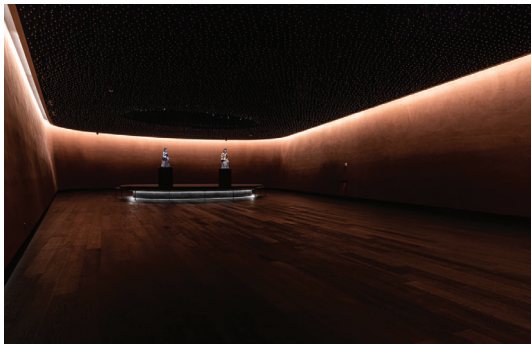
半跏思惟像の所蔵経緯と制作地

この2体の国宝半跏思惟像がいつ製作され、どこで発見されたかは未だ明らかになっていません。ところが、1体の半跏思惟像(展示室で右側)は、1912年に李王家博物館で日本人古美術商の梶山義英氏から当時としては大金の2600ウォンで購入されました。同年、もう1体の半跏思惟像(左側)は、朝鮮総督府から実業家で骨董品コレクターの淵上貞助氏に4000ウォンの補償金で購入されました。1916年、ようやく朝鮮総督府博物館に入手されました。

実際、半跏思惟像の保管先や製作地に関わる手がかりは、あいにく記録として残されておらず、ただ口伝されているのみです。宝冠や装身具、衣文などの特徴から見てみると、半跏思惟像(右側)は、7世紀前半の新羅で制作されたものと推定されます。

3

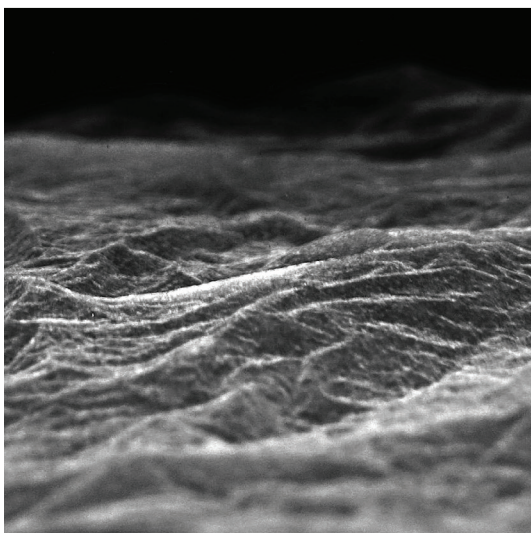
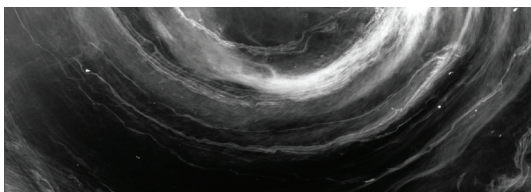
半跏思惟像の空間



現実から離れた思惟の時間

<思惟空間>

2体の国宝半跏思惟像が展示されている空間です。建築家の崔旭(チェ・ウク、101アーキテクト代表)氏がデザインしました。半跏思惟像のエネルギーと空間が一体化された感覚を経験していただくため、観覧客との距離を考えて展示室が小劇場のような広さになっています。暗闇に包まれた入口、わずかに傾いた壁と床、きらめく天井など、静かな展示空間でじっくりと半跏思惟像をご覧ください。



展示メディアアート

循環

ジャン＝ジュリアン・プース, 2021

デジタルビデオ、3430×1200 ピクセル、5分、白黒、サウンド

果てしない物質の循環と宇宙の膨張を象徴的に表した作品である。固体・液体・気体といったそれぞれ異なる状態で存在する物質を、微細な大きさから巨大な大きさへと変化させることで、ぜひ観覧客の皆様には物の本質を見ていただきたい。

作家	ジャン＝ジュリアン・プース
芸術監督	ジャン＝ジュリアン・プース、JJ ウォーカー
デザイン	エマニュエル・ウルフス
サウンドサンプル	ギヨーム・ボンズレ、フランシスコ・ロペス

灯台

ジャン＝ジュリアン・プース, 2021

アニメーション、9600 x 1920 ピクセル、3分、白黒&カラー、サウンド

《循環》のブリクエルとして制作された《灯台》において、半跏思惟像はさまよう魂のための希望の光として示され、彼らを取り巻く抽象的な自然の中に拡散し統合される。

作家	ジャン＝ジュリアン・プース
3Dスキャン	エマニュエル・ウルフス
サウンドサンプル	ギヨーム・ボンズレ、フランシスコ・ロペス



仮想空間で出会う半跏思惟像

ネイバー・ゼペットワールド「ヒーリングの丘(feat. 国立中央博物館・半跏思惟像)」では、半跏思惟像にお会いできます。ここは、半跏思惟像の微笑みや思惟の哲学が伝わる癒しのメッセージをZ世代のグローバルな感性で表現したバーチャル博物館です。この世界で半跏思惟像は、博物館の展示室ではなく光に満ちた平和な自然の中に存在します。参加される方々はこの世界中のさまざまな物や他の参加者とリアルタイムでコミュニケーションができます。



半跏思惟像グッズ

半跏思惟像グッズは、ミュージアムショップや国立博物館文化財団のオンラインショップでご購入いただけます。

詳細は、こちらのウェブページmuseumshop.or.krをご参照ください。

